

# 年少兒保育の方法的問題

鈴木 久

先頃、都立保育所保育の研究グループで、保育要領による自由保育についての経過報告を合せた時、年少兒の問題と娯の問題をきき、考えさせられる所があつたので、自分の保育經驗を通して之について意見を述べ、御批判と御指導を得たいと思つた。

之は、保育兒全體の中の満三歳兒の保育方法を考えたいので、年少兒取扱いの細な技術的方法ではない。

保育の方針を考える時、私の場合、問題は何時も次の様な所から起つた。

一、保育一人の責任負擔にある幼兒數が多いこと。

一、保育所内幼兒生活目標について、「幼兒文化的教育」と、廣い意味の「文化的社會生活教育」とのどちらに比重を傾けたらよいかと云うこと。

一、もし假に、保育一人の受持つ幼兒數が輕減されたとしても、幼兒生活の大半が、年齢的孤立のグループでのみ行われてよいか、という疑問。

保育所での幼兒の生活が、楽しく又教育的効果も上げ、その上保育も幼兒と共に楽しくありたいとの慾望から、この間

題をどの様に解決したらよいかと、色々な保育の試みを經驗してみた。昭和九年秋から十一年秋迄は年齢混合地域社會別グループのみの保育を、昭和十六年には孤立した年齢別組わけ保育を、翌年には消極的に地域別グループ生活をとり入れた年齢別保育を、十八年には、年齢別組分けと、年齢混合地域別グループとを交流させた保育を行つてみた。此の各々についての私の意圖や方法や反省は別の機會にゆずり、十六・七年の年少兒保育を土臺に、娯の問題と、三歳兒保育の方法的問題についての考えを述べたい。(後の記録は私が愛育研究所の仕重として實施したものの記録であるのを、この爲に使用させて下さつた山下俊郎先生の御好意に感謝している)

保育所の幼兒が、その家庭で父母と共に過す時間は殆ど睡眠中であり、朝夕の二・四時間は目醒めていても、その父母が忙しさと疲れの時にあたる爲、彼等の生長發達の爲のよい心遣いが忘れられがちである。勤務家庭の母は、思いながらも、幼兒の娯や習慣についてじつくり考え行ふ時間も心の餘裕も少く、教養も不足している。この家庭でしつけられぬ面を、幼兒が身心共に生長の養きに充ちている保育所の生活の

中で習得させ、之に母の協力を得て身についたものとさせなければならぬ。又幼児が自發的興味で遊びのグループを構成し、それを楽しく發展させて行く爲に、規律や秩序を守るとか、制約に堪える等の生活のしかたを身につけなければならぬ。

娯とは結局、彼等のグループ遊びの生活即ち社會生活を、楽しく、スムーズにするための生活技術を、幼児相互の生活の中で習得して行くことではないかと思う。之の基礎的習得の時期を私は年少兒におきたい。年長者に對して割合云うなりになり、依存している時代に、大體の確立をさせたいと思う。彼等を適切な環境に於て社會化させ、種々な生活上の基本的な習慣を、より早く身につける事で彼等の集團生活への自信も強くなるのではないかと思う、それで私は年少兒保育に於て幼兒文化的教育に心を傾けるよりは社會化教育に比重を加えたい。年齢混合による、自由グループ保育に於ても、年少兒は一應切り離して年齢別保育を主體として、その非社會性を、年上の子供の壓力が餘り強くない所で社會化させて行かなければならないと考えるのである。

こゝで、昭和十六、七年の年少兒保育に於て、基本的習慣並に社會生活の娯で取上げたものと、夫がどの程度に身についたか、そして年長組に成長した場合の保育にどう現れたかを概略述べてみたい。

取扱つた幼兒家庭は、經濟的に中の下の勤勞家庭であり、母は家事の手傳いや内職をしている者が多かつた。十六年度

年少兒十五名（この中O・A四歳でM・A三歳の者三名あり）。I・Q平均九六、七十代二名、八十代一名、九十代五名、百以上七名。早産その他發育が甚しく悪いと云う者がなかつた。十七年度は條件は殆ど同じで、年少兒十九名、平均I・Q九三、八十以下一名、八十代八名、九十代六名、百以上四名であつた。

家庭、殊に母親との連絡は嚴重な程密にし、毎日の連絡帳は單なる事故記入のみでなく、排泄の有無、食事の量、起床、就床の時間、寝起きの状態、家庭での氣嫌等、健康狀況は必ず符號式で記入し、その他保育所内での狀況、家庭で常と變つた言動のあつた場合等は必ず記入して貰つた。毎月一度必ず母の會を開いて、種々な講演の外、子供の成長の狀態を報告し合つた。その他、梅雨期、夏期、冬期、年度末休み等、季節により夫々母と子の協力による生活習慣ごよみの記入等、保育にとつても、勞力と根氣の要る負擔の多い事であつたが、高女卒が二、三名しかいない働く母にとつては、吾が子一人或は二人丈の事ではあるが、非常な重荷の様な感じであつたと思うが、一日の殆どを家庭内で過す子供と、時間の長短はあつても、幼兒の精神的生活的より所は、家庭であり、その母であること、母と保育所保育が一體とならなくては、幼兒のよき發達は望めない事を繰返し話して、協力を求めた。

基本的習慣で取上げた項目は別表の様である。組を受持つた保育は違つたが、取上げられた事項は、いくらか月のづれ

があつても、ほゞ同じ様なものであつた。そして取上げてから早いものは大體一ヶ月で自立を受動的に完了しているが、十ヶ月目、或は十一ヶ月目に殆どが能動的に自立をしている。この中で女兒の用便時の紙使用と、男児用便所の手洗いがなか／＼能動的に出來ず二年目に注意が繰返されている。次に社會生活の躰についても別表の様であるが、年少兒の之は完了と云つても、大體出來ると云う意味で、二年目はこの基礎の上により廣範圍の社會化とその習慣づけが行われた。

十六年度の年少兒は、その頃の「自由遊び」の時年長兒と共にある中で、大體に孤立した年齢別保育であり、保育が事務的な事で保育の手がぬけたり、途中で若い未経験の保育に變つたりした爲繼續的に成長が見守れなかつた事が二年保育に影響して、新入兒と共に、種々やりなおさなければならなかつた事が多かつた。十七年度の場合は一年間同じ人がじつくり繼續して保育をつゞけて居る。又、保育所全體の幼兒を住居の近い者七・八人を單位に右住別グループをつくり、夫を三つ或は四つ、合せたものを一人の保育が責任を持つ様にし、登所退所の時は必ず一緒に、全體で整列する時もこのグループで集る、等し、又二年兒は時々年少兒の組に手傳いに行く等消極的に年齢の混合した生活を計つた。

幼兒文化面でも基本的なものを覺える方針で行つたが、之は略し、要は生活技術の習得に比重を傾けた保育を行つたわけである。

三年目即ちこの二つの組が年長、中組となつた時積極的に地域別グループ、年齢混合の保育を行つた。この年の年少組は年齢別組分けの生活を主體として、三年保育兒二年保育兒の責任もつた、四・五名の手傳いが積極的につゞけられて、全體の壓力の中でなく、年長と年少の親しい融合の中で、いたわりと助力と依頼との生活を展開させた。

保育所内に於ける社會生活の技術を一通り身につけた前述二年間の子供達の動きは明快で、大ていの事は、自身で處理出來、保育は確立されて行く基礎的な社會生活の技術があつた。戻りしない様に心がける丈で濟んだ。所謂躰の事を氣に病む要なく、たゞ夫を如何にして、自主的に幼兒相互の力で解決し、高度な社會化に向わせるかを計つて行く丈であつた。

園の花の夫々がしらぬ間、咲き匂う喜びを度々此の子供達の中に味つたのは、年少組を一年間地味にその生活の基礎の習慣づけに過し、小さな修練道場と云う批評の言葉の全面的に肯定して自分の意圖をまげなかつた結果であつた。

別表(一) 基本的習慣

〔清潔〕

昭和十六年	昭和十七年	備考
四月 (保育なし)	うがい。	うがいをすると云うことだけ受動的に完了する。
五月 手洗い。	手洗い。	九月にかみ方再び練習。 ふき方は九月に完了。 六月に自立。
六月 鼻をかむ。 うがい。	鼻かみ。 手ふき。 足ふき。 足洗い。	受動的に自立。
七月 指その他の物を口に入れない。 六月の繼續。	手洗い。 足洗い。 洗顔。	五月から繼續、半数は顔をぬらすだけ。 上段の繼續は大體完了。 十月に受動的に完了。
九月 洗顔。	鼻紙の使い方。 食後のうがい。	受動的に完了。
十月 手拭のしまつ。 歯みがき。	九月の繼續。 前月と同じ。	歯ブラシの使い方。 ひとの豫防として、以前のものと確立を計る。
十一月 手足の清潔。 ハンカチを綺麗に。	手のふき方。	上、下段とも二―三名を残して受身の完了。
十二月 手の清潔。 顔を綺麗に。	鼻を出していない。	云はれれば出来ると云う事で完了。 忘れがちである。
一月	うがい。 テーク ガラク 用便後の手洗い。	

〔食 事〕

四月	
五月	食器の置き方。 食事中大聲で話をしない。
六月	食後、隣りの友達を待つ。 よくかむ。 おかずの食べ方。
七月	右に同じ。
九月	好き、きらいをしない。 おかずを残さない。
十月	箸の使い方。(はさむ) 食べ終はる時間。
十一月	(隣りの友達と同じ位に) 食後のあとしまつをきちんとする。
十二月	こぼさない。

辨當、風呂敷のしまつ。  
いただきます。  
ごちそうさま。  
こぼしたのを拾ふ。  
みんなの済む迄立たない。  
こぼさない。  
のこさない。  
こぼしたのを拾ふ。  
全體的に(用意、食事、あとしまつ)  
よくかむ。  
みんなと一緒にすむ。  
だまつて食べる。  
きれいに食べる。  
行儀よく食べる。  
だまつてたべる。  
食事に集中する。  
食器はこび  
(長い廊下、歩き方、盆の持ち方)  
食後のあとしまつ。

箱がつまめず、靴の中に入れる丈。  
二週目位にやゝ完了。  
五人位出來ず。  
命令とがまんて完了。  
上段三人のぞいて完了。  
やゝ完了。  
注意すれば拾える。  
云はれて、手をかりずに出來る。  
先に食べてしまふ子、あとへ残す子二、  
三名のみ。  
未完、五—七名。  
半數未完。絶えず注意。  
個人的に指導。  
四—六名未完。  
下段受動的に十二月完了。  
十二月も繼續。  
上、下段共完了。  
大盤完了

一月

〔排泄〕

食事の全體的順序。  
食事當番の仕事。  
箸の持ち方。

お盆持ち運び方完了。  
意識して正しい持ち方にしようとする。】

四月

便所の使い方。

(下駄にのつてする)

戸をしめてする。

女児紙をつかふ。

朝の排泄。  
用便後の手洗い。  
パンツをはく。  
きちんと下駄にのつてする。  
もらした時は恥しい。

女児紙を使う。

完了。  
上段完了。  
自立完了。  
一―二名を残して完了。  
上段、注意しないと使はぬ、未完。  
下段、叱る。恥しさの自覺、なし二名。  
十二月迄繼續(受動的)

九月  
十月  
十一月  
十二月

用便後水栓を引くの忘れない。  
男女共汚さぬ様に使う。  
がまんしない。

〔着衣〕

五月

パンツ、ズロースの着脱。

前かけ、上つぱり、毛布のたゝみ方。

七月

エプロン上着をたゝむ。

九月

洋服の上着をきる。

前かけの紐(結んで首を入れる)

ボタンをひとりでかける。

着物をきちんと着る。

(用便後のパンツ、ズロース)

薄着をする。

ねまきに着換える時すつぱり操で。

上段一ヶ月で三名残し自立完了。  
下段に六月に完了。  
お互にしあふ、ひも結びは未完。  
スナップは完了。  
完了。

十二月 薄着の習慣。

上衣、前かけ、足袋はひとりで。

家庭と連絡すること。

スナップ、ボタン、コハセがきちんとついているものは自立完了。

〔睡眠〕

四月

五月

六月

七月

九月

十月

四月

食後の休憩。

床につく迄の準備。

(清潔、着衣の習慣とともに)

右と同じ。

静にねむる。(寢室に入ったら静にする)

睡眠時間の調査。

家庭での就床時間の調査。

別表(二)

社会生活の観察

友達と並んでねる。

一緒にねむる。

おげんよく起きる。

ふとんの上をふまぬ。

休憩は静に(正しい寝方)

早くねついた子のさまたげをしない。醒めたら用便をひとり。

十一月 先生がいなくてもねられる。

十二月 用意だけ一緒にする。

大きな子供と手をつなぐ。

所持品置場を覚える。

大きい子に遊んでもらう。

友達と手をつなぐ。

挨拶 おはよう。

さよなら。

お返事 ハイ。

二列ならび。

ごめんなさい。

はじめ大きい子供のねるのをみる。

四週目に一人を残し完了。

上段二名を残し完了。

下段、五、六の二ヶ月で十五分でねむりにつき一時間で目をさます様になる。

大體完了。

受動的に完了。

完了。

完了。

五月、自發的に完了。

四週目に完了。

一、二週友達の觀念なし、五月末完了。

五月末完了。

五月	所持品置場を覚える。 玩具のあとしまつ。 あいさつ おはよう。 さよなら。 集る合図を覚えて守る。	六月	並び順を覚える。 前に並んでいる友達を椅子でおさない。	七月	八	九月	早く整列する。 帰りの時のお友達。 散歩の時のお友達（年長の子供と手を なぐ）	十月	十一月	願書をまもる。 手洗いの時の順。 出入りの時の順。
部屋の前を歩ける。 先生がいなくても待てる。 玩具のかたづけ。 おかえりの用意。	なくした物をさがす。 友達をひつかかない。 先生の名前、簡単な依頼、傳言など お友達にしてあげる。していただく。 待避、避難訓練。 集団生活の中で自分の生活を自立して出 来る。 お友達とけんかしない。 休憩の部屋では静に。 ゴザの上をふまない。 名前を呼ばれたら ハイ。 注意されたら ハイ。 ありがとう。	色々な儀式の時の態度。 自分の抽出し、友人の抽出しの區別。 もち物の整理。 友達をきめた二列並び。	受動的に出来る。 自發的に完了。 完了。 下段、してあげる完了。 していたとく。九月に未完二名。 可能な命令に對して、行動がとれる。 保母がいれば出来る。 上段、大體いやがらず手をつなぐ。 時々うつかりする。 十六年度の子供は十七年五月に迄がと りあげられている。 友達同志では未完。目上にうながされて する。 大體可能。 未完、十二月大體完了。							



十二月

誰とでも仲よく遊ぶ。  
歸りの仕度は皆と一緒に。

共有物の扱い方。

登所してする事をきちんと。(辨賞、手  
拭、連絡帳を夫々の置場えきちんと)

一月

二月

椅子を机の中に入れる(立つてから)

年上の人の云うことをきく。

新年の挨拶。

並んだ順に(あとから行つたら後につく)

お友達が待つてゐる時は早く。

つげ口しない。

友達をいたわる(痛い時等)

部屋では小さい聲で話す。

目上の人に對する丁寧な言葉づかい。

二、三名残して完了。

受身で出来る。

完了。

受動的に半数可能。

未完。

顔をみられて氣がつく程度。

(三八頁より) 都市の乳兒全體農村の乳兒全體として見る時に、笑うことの少ない農村の子供、自發性行動の少ない農村の子供は既に五ヶ月迄の終りに於て性格的差異を示しつつあると見ることができるとではなからうか。

今此れだけの例數及び觀察時間文けをもつて早急に判斷することは許されない。特に各兒童の個人差の問題が考慮されなければならぬから、一層の慎重を要する次第である。だ

と右の第四のような考え方が許されると思う理由が一つある。それは終戦後、我々の研究所を中心に、日本女子大の學生諸氏多數の協力を得て、もう少し年上のもつと多數の幼兒の性格調査をなしつつあるが、それが都市と農村の兒童の性

格の上にならぬ開きが見られるような結果を示している。然しそれにしても此研究の對象となつた乳兒に關する結論としては依然慎重であることが必要である。それ故に我々は、此結果を更に將來の研究への一提案として取り上げるに止めなければならぬであらう。で終戦後再開した此研究がどんな風に結實するかは勿論まだまだ未知數であるが、いくらか部分的にでもまとまつたら讀者諸賢の御批判を仰ぎたいと思ふ。